

岸和田市郷土文化室（自然資料館（自然史担当）・郷土史担当・文化財担当）

平成 20 年 10 月 8 日

古絵図の世界

山中 吾朗

歴史上、為政者が地図を作成する場合、その支配領域を明確化したり、支配を円滑に行うため—例えば租税徴収に役立てる等—であったりと様々な意図をもって作成されました。江戸時代には、幕府が諸大名に命じて国絵図（近代以後の「地図」と違い実測図ではなく、また、絵画的表現が所々に用いられているので、以下、「絵図」と呼びます）を作成・提出させていますが、これは幕府が、年貢賦課の基準となる各国・郡ごとの石高を正確に把握するためのものでした。江戸時代にはそれ以外にも様々な目的で絵図が作成され、作成者も幕藩領主ばかりではなく、村が自発的に作成することも度々ありました。村の境界や入会地の権利関係を明示するため、あるいは新田開発や道・池普請等の計画を表わす場合など作成目的は様々ですが、多様かつ多数の絵図が残されたことで、現代の私たちは古文書などではよくわからない昔の風景なども想像することができます。岸和田市内各地の村や町を描いた絵図も多数残されています。

岸和田城では、今秋、企画展「古絵図にみる岸和田」を開催しますが、この展示では「城絵図」「城下町図」「村・浦絵図」「水利図」に分けて、市内各地の近世絵図約 35 点を展示します。以下、主な展示資料について簡単にご紹介します。

①岸和田古城図（大阪歴史博物館所蔵）

岸和田藩士と思われる浅野秀肥が文政 9（1826）年に作成した絵図です。従来から岸和田古城跡（野田町）と呼ばれてきた場所は「本城」と記され、その山側（岸城中学校あたり）に広大な「二之郭」があったように描かれています。岸和田古城はこれまで南北朝期に楠木一族の和田氏が築城した、後の岸和田城の前身と言われてきましたが、近年、南北朝～戦国期の在地領主岸和田氏の居館跡とみる説が有力です。平成 18～19 年度に岸和田市教育委員会が絵図に「本城」と記載のある場所を発掘調査した結果、室町期の城跡で、16 世紀初め頃に廃絶したことが、絵図記載の本城の形状や寸法が現状とほぼ一致すること等が確認され、絵図の正確さが裏付けられました。

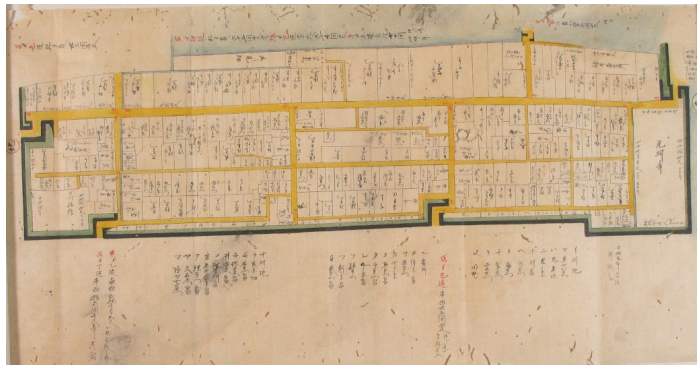
②本町・中町図（岸和田市教委所蔵）

岸和田城下の本町・中町の町割を示した図です。紀州街道沿いには屋号をもつ商家が建ち並び、所々に藩士屋敷も点在しています。また、浜の石垣に沿いには畠地もあったことがわかります。注目すべきは円成寺の位置が藩士の屋敷となっていることで、円成寺は江戸前期頃に岸和田村から現在地に移転したよう

で、絵図の景観年代は江戸前期頃と考えられます。

③荒木村絵図（荒木勇氏所蔵）

延宝 5（1677）～7 年、幕府は畿内近国、讃岐・陸奥などの幕府領の検地を実施し、この検地によって決められた村高は以後、明治初年まで年貢賦課の基礎とされました。本図は検地にあたって作成された絵図で、田畠一筆ごとの等級・面積・石高が示されています。絵図中央部に白く塗られた荒木村の集落が描かれていますが、その周囲は環濠のように水路がめぐり、その内、庄屋屋敷は東西三六間・南北四八間を占めていました。庄屋荒木源太夫は、伊丹城主荒木村重の末裔と伝え、伊丹城没落時に村重の子が乳母とともに泉州へ逃れ、後に当地を開発して荒木村と呼ぶようになったといわれています。しかし、本図にみられるように、環濠的な集落景観や条里状の地割などからみて、荒木村は中世以前の開発にかかる可能性が高いと思われます。家が立ち並ぶ現在の風景からは想像しにくいのですが、絵図にみられる荒木村の風景は屋敷が村のごく一部に集まり、その周囲に広大な田畠が広がっていました。



本町・中町図

現在確認されている最古の久米田池絵図です。裏面に久米田池郷の代表者と尾生村代表者の署名があります。寛永 15（1638）年、尾生村が八田川（春木川）を堰き止めて新池を築こうとしたために、久米田池郷は取水の妨げになるとして新池普請の差し止めを岸和田藩へ願い出、相論となった際に作成された絵図です。江戸前期までは、久米田池は牛滝川からも取水していましたが、主には池の南側を流れる八田川から取水していました。この相論の結末は不明ですが、やがて八田川の川床が削れて久米田池への取水が不可能となり、以後、久米田池は専ら牛滝川からの取水に頼るようになりました。

④久米田池付近用水絵図（大阪歴史博物館所蔵）

絵図は現代の地図とは違い、方位や地形が必ずしも正確ではありませんが、絵図作成者は必ず何らかの目的をもってこれを作成したはずで、現代の私たちの目からは不正確な図でもこれで絵図作成者の目的は達せられたはずです。絵図を見る際、まずこの絵図が何のために作られたのかを考えながら観察してみると、意外な事実が見えてくるかもしれません。この機会に皆さんも絵図の「絵解き」に挑戦してみてください。

（やまなかごろう：郷土文化室学芸員）

企画展「古絵図にみる岸和田」

期 間：10 月 1 日(水)～11 月 30 日(日)
会 場：岸和田城天守閣 2 階展示室
時 間：午前 10 時～午後 5 時(入場は 4 時まで)
入場料：大人 300 円 中学生以下無料
休場日：月曜日（10/13、11/3、11/24 は開場）

校庭の植物 2. ニレ科の樹木

岡本 素治

校庭や公園などによく植えられているニレ科植物は、ケヤキ、アキニレ、エノキ、ムクノキの 4 種です。

慣れれば見間違えることはない特徴的な樹木ばかりです。見分け方のポイントを図1にまとめておきます。

ケヤキ：八方に枝を伸ばし細かく枝分かれして、ドーム状のきれいな樹冠をつくる。若木の樹皮は横に筋状の皮目（ひもく；元の皮を破ってコルク状の組織が現れた部分。水分を逃さずに空気を通して内部組織の呼吸を助ける）が発達するが、老木になると薄い雲紋状の破片となっ

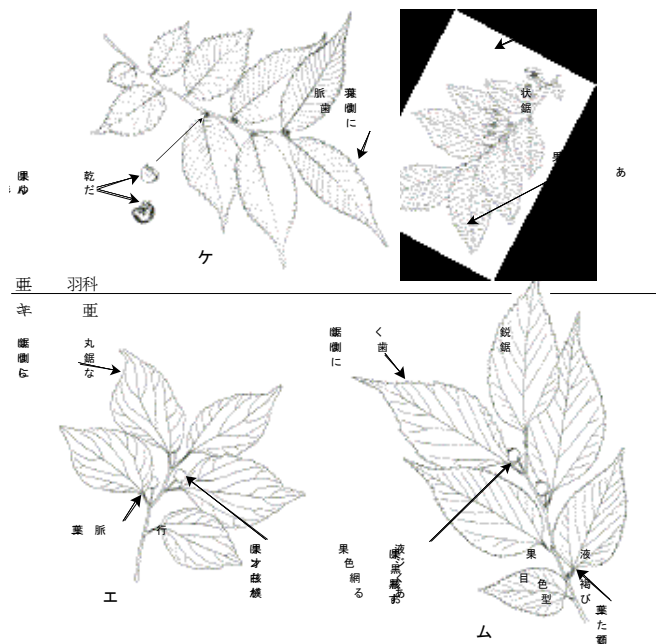


図1. 普通に見られるニレ科植物

山地の溪谷や丘陵地の河畔林に多い落葉高木であるが、公園樹や街路樹として最もよく利用されている国産樹種の一つである。花は葉と同じ芽の中で作られる混芽であるが、花のつく芽は花のない芽より春の芽吹きが1週間以上早い

ため、とくに若木では、春の芽出しがバラバラの印象を受けることが多い。夏でも、実が付いた小枝＝花が咲いた小枝の葉は小さいので区別できる。実の付いた小枝では、葉も果実も枝から落ちにくく、果実は枯れ葉の付いた枝とともに風で散らされる。竹とんぼのようにクルクル回転しながら風に舞っている姿をしばしば見かける。

アキニレ：細かく雲紋状にはげる樹皮が特徴的。典型的な葉は小型で長さ 3cm，幅 1.5cm 前後であるが、剪定後に伸びた枝などでは大きな葉が出ることもある。葉はゆがんだ卵形で、縁に低い三角状の鋸歯が並ぶ。羽状脈で二次脈はしばしば先端部で分岐してそれぞれが鋸歯に入る。花はその年に出た枝の葉腋に付き初秋に開く。両性花。果実は扁平な翼果で先端に花柱の切れ目がある。中部に子房室のふくらみがあり、中に1種子を入れる。

平野部の河川敷などに多い落葉中高木で公園などにもよく植えられている。果実は風で散らされるので、生け垣のすきまなど吹きだまりとなる場所に実生や若木をよく見かける。

樹皮は複雑な雲紋状の片になってはがれる（図2）。樹木の肥大成長は樹皮のすぐ内側の形成層で起こるが、材の成長にともない、それを包む樹皮も成長しなければならない。樹皮はコルク形成層で成長する。コルク形成層がどのようなパターンで配列するかで樹皮のさまざまなパターンが生まれる。ニレ科は樹皮の成長を観察する良い材料である。アキニレの樹皮が集中的にはがれる春先に、はがれた破片が付いていた場所を見つける遊びなども楽しめる。



図2. アキニレの樹皮

縁全体にわたり鋭い鋸歯があり、側脈は鋸歯に入る。側脈は最下の脈が強く（3行脈）、二次脈から太い三次の脈が分かれて基部の鋸歯に入る。果実は液果で9月の半ばから紫黒色に熟す。核はゆがんだ球形、紫褐色でざらつき、頂部に白い突起物がある。

平地から低山地まで普通に見られる落葉高木。熟した果実は甘くておいしく、ヒヨドリやムクドリに食べられて種子が運ばれる。ただし、ムクノキの名はムクドリとは関係なく、葉の表面がざらつくので木製品を磨くのに利用されたことによる（剥くの木）。

ムクノキは樹皮の生長パターンを観察するのによい材料である。白い筋は表面の皮がはがれて繊維の層がほとんど露出した部分（図3）。黒っぽい部分が生長しているより新しい樹皮で、その最も活動的な場所に茶色の皮目の列がある。幹や枝の肥大成長が著しい場所を観察すると、樹皮の古い繊維層が内部の成長による圧力で裂かれて、その裂け目を新しい繊維層（茶色の筋の方向に走る）が埋めている様子が分かる（図4）。

エノキ：樹皮は灰色～灰黒色。細かい縦の皮目があるが、大きな割れ目は老木になってもできない。若木には、葉や枝の落ち跡に横に平行する筋が見られる。葉は広卵形で先端部に丸みをおびた鋸歯があるが、鋸歯に向かう側脈の先端は鋸歯に入らず前方へ曲がる。葉脈は3行脈。果実は夏にオレンジ色に熟す。液果タイプで果肉は甘く食べられるが水分は少ない。核は白く、網目模様がある。

平野の川岸林や社寺林、道ばたから山地まで普通に見られる落葉高木で、果実が鳥に食われて種子散布されるため、いろんな場所に実生や若木が見られる。エノキの花は4月ごろに新芽が出てくるときに咲くが、雄花を観察すると楽しい。雄しべの花糸は、はじめは内曲していて急にはじけて花粉を飛ばす。これはクワ科やイラクサ科と共通する性質で、エノキの仲間（エノキ亜科）はニレやケヤキ（ニレ亜科）とよりも、クワ科やイラクサ科と近縁であるという説の根拠のひとつになる。

（おかもともとはる：自然資料館館長）



図3. ムクノキの樹皮



図4. 肥大生長が盛んな部分での樹皮の生長

※お願い [fromM]は、学校教職員に1部ずつお配りください。

担当の方は忙しいところ申し訳ありませんが、よろしくお願い申し上げます。

【from M】では、みなさまからのご意見、ご感想、ご質問等をお待ちしています。博物館での学習、研究等に関する情報、地域の自然環境や歴史に関する面白いトピックスなどがありましたら、ぜひご投稿ください。お名前、連絡先、所属等をご記入の上、右記の宛先までお送りください。電子メールでも受け付けています。

連絡・問い合わせ先

〒596-0072 岸和田市堺町 6-5 きしわだ自然資料館
TEL: (072) 423- 8100 FAX : (072) 423- 8101
Email: sizen@city.kishiwada.osaka.jp
自然資料館ホームページ URL:
<http://www.city.kishiwada.osaka.jp/sosiki/k-nature/>
Yahoo Japan の検索で「きしわだ」と入力し、検索すれば、簡単です)

